

特集1

学生ボランティア活動の息吹と展開

特集2

農と山林に向かう



題字 黒部行子
絵 成瀬洋平 (本学卒業生)

都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

新たな繋がりがつくる 『未来家族』としての地域

■大橋 謙策



日本の社会は、21世紀に入り10年を経たにも拘わらず「漂流」していると言わざるを得ません。それどころか、「無縁社会」、「孤族」というジャーナリストが造語した用語がマスコミを賑わしています。それは、日本に伝来し、定着した2000年来の稲作農耕という産業構造が産み出した文化や意識が、急速に変わりつつある社会構造及びそこで求められる生活様式、意識との乖離をもたらし、苦悶している状況です。

工業という産業構造は、原料と労働力がありさえすればどこにでも工場を造って生産出来るという移動性に富んでいます。かつては、臨海工業地帯であったものが、その後は臨空工業地帯になり、いまや日本の工場は中国やベトナム、バングラデシユなど海外へと生産拠点を次々と変えています。しかしながら、稲作農耕は、工業中心の産業構造とは異なり、

すぐれて土着性と共同性が要求されます。棚田に代表されるように、用水の確保や田んぼの造成・維持には多くの協働した労力が必要であり、田植えや稲の刈り入れには「結い」と呼ばれる労働力の集約が必要でした。田んぼという生産手段は移動が困難であり、その土地の田んぼが養える人口規模には限りがあります。したがって、「一所懸命」、「出る釘は打たれる」、「長いものに巻かれる」という語句に代表されるように、土地に固執し、共同性を強める結果、ややもすると「ウチとソト」を使い分け、「ウチ」にあつては個々の意志よりも世間体を憚る文化を、「ソト」については「外の人（旅の人）」を受け入れない排他性の文化を作りあげてきました。そこでは、一見家族の紐帯が豊かにあるように思われていますが、その背後には「姥捨て伝説」や子どもの「間引き」、あるいは二三男には結婚させないという悲しい、厳しい状況がありました。「家族」は、血の繋がりのいうこともさることながら、「夫婦養子」にみられるように、田んぼという生産手段の確保・維持に関わる組織でもありました。

日本の家族は儒教や仏教の教えの影響もあつて、「家」志向が強く、「家族の紐帯」も強いと言われてきました。それは稲作農耕が産業構造の基軸であった時代でこそ言えた状況であり、今日のように産業構造が大きく変り、人の移動性が強まり、土地に固執する必要がない中では、改めてその家族のあり方も問われざるを得ません。

文化勲章の受章者でもある中根千枝先生は、日本の社会構造を「タテ社会」と表現しましたが、その「タテ社会」に見られる考え方は、「場」という枠組みが



2011年1月30日 地域交流研究フォーラムで講演する大橋謙策氏

あることを前提に、枠組みの中で行動し、枠組みに守られることを望み、人を個人の資質で評価するより、枠組みの中の地位や肩書きで評価することになります。したがって、「寄らば大樹の陰」のように安定志向が強く、個人的フロンティア精神は必ずしも旺盛ではなく、前例踏襲 的保守体質をもつこととなります。

しかし、二一世紀の今日では、人的にも、物的にも国際化がすすみ、かつ産業構造が変化し、地域に住む人の年齢構成が変容してきており、従来の「タテ社会」で作りあげられてきた組織や方法は有効性を持ち得ないところになってきます。これからは、一人一人の意志やその人の資質及び能力に応じた新たな関係づくりと、新たな機能を有した組織作りが求められることとなります。それは、まさに「ネットワーク型ヨコ社会」を創造することです。

日本の社会は、世界に例を見ないスピードで少子高齢社会がすすみ、かつ戦後初期に設計された社会保障制度は今日の産業構造の急激な変化の中で効力を失いつつあり、多くの人がどのような人生設計をしたらいいのか、どのような家族関係を構築したらいいのか、どのような地域社会を創造したらいいのかを混乱を極めていきます。

ハウス (HouseJS) という人は、人間が生きて行く上には4つのソーシャルサポートネットワーク(支えあいの機能)が必要であると指摘しています。それは、喜びや悲しみを共有して、支える情緒的支援、生活上のお手伝いの機能(手段的支援)であり、人間として認め評価してあげる支援、口コミで必要な情報を伝えてあげる支援の4つです。今、この4つ

の機能が家族においても、地域においても、我々の日常生活において脆弱になり、人が孤立し、無縁社会と呼ばれる状況が作り出されてきています。

厚生労働省はこれらの問題を解決するために、2008年3月に「地域における『新たな支え合い』を求めて——住民と行政の協働による新しい福祉」という研究報告書を出しました。それは、国民の安全と安心の生活を守るためには、行政が制度化したサービスの提供だけでは限界があり、行政の制度外のニーズ、制度の谷間にある問題、複合的な問題、社会的排除の問題等は住民と行政が協働しないと解決出来ないとして、地域における新たな支え合いの創出、地域福祉推進の必要性を指摘し、それを踏まえた「安心生活創造事業」を国のモデル事業として展開しています。それは、従来の町内会や自治会という地縁組織でもなく、かつ家族に過度の期待や幻想を抱くこともなく、お互いが改めて地域に暮らす住民の生活を支援する組織を作り、活動を自主的に展開することを求めています。それは、血縁関係ではない、地域における新たな「未来家族」ともいえる繋がりへの創造です。

都留文科大学の理念や地域交流研究センターの活動は、まさに新しい住民の創造に必要な学習の機会の提供と新たな繋がりを創出する挑戦的な、新たな民主主義の実験であり、大いに期待しています。

(おおはし けんさく・日本社会事業大学大学院特任教授
前学長、特定非営利活動法人日本地域福祉研究所理事長)

学生ボランティア活動の息吹と展開

ボランティアは、まさにボランティアだからこそ、まだ十分制度化されていない様々なニーズと出会い、そのニーズに対する応えを関係者が協同して考えあう、その担い手として大変重要な存在です。しかし、また同時に、活動の継続性や財政的基盤の不足、専門性の面から、困難や不安など、課題も多く抱えています。

これら可能性と課題を出し合っている、そして社会福祉施設関係者や社会福祉協議会など、専門的な立場の人や、地域でじっくりと社会的活動に関わってきた市民の方々との相互交流のなかで、これまでの取り組みを充実させるとともに、新しい試みにもチャレンジしていこう…そうした流れができています。特集1ではその流れを作ってきた人たちに、これまでの経過や想いをたどっていただきました。



「文大ボランティアひろば」の誕生から3年

■杉本光司

平成20年5月、都留市社会福祉協議会と、地域交流研究センターとが協議し、「地域のボランティアニーズと本学学生を引き合わせるシステム」の構築を目指すこととなり、新しい会合をスタートさせることができました。主軸となる学生サークルは、「つくしの会」、「Σソサエティ」「つる子どもまつり事務局」の3団体で、その後「Work-Waku都留」も参

加しました。会合では、各団体からの活動報告、社

会福祉協議会からのボランティアニーズの情報提供、各団体からの協力呼びかけや新事業の提案、地域のボランティア・コーディネーターからの意見などが交わされています。社会福祉協議会にとっては、とりわけ大学生対象のボランティアニーズを持ち込む「窓口」ができたことが大きく、学生にとっては、地域のボランティアを取り巻く状況を知ることができること、相互の活動に触れて刺激を受け合えること、これらを通じて活動が活性化されるという意味があります。会合の名称は「文大ボランティアひろば」(だれでもどうぞ) (略称・ボラひろ) と命名されました。

さて、「ボラひろ」は発足以来、基本的には第4水曜日の午後6時15分から本学の教室にて開催されることとなりました。また、大学のホームページに「ボランティアひろば」のサイトを立ち上げ運営も始めました。さらに、「ボラひろ」では、新しい取り組みを始める際には、その都度、新しいプロジェクトチームを立ち上げて対応することにしました。

◇ こうしたなかから、平成21年には「障がいのある

方々の余暇活動支援」について新たな取組みが開始され、これまでのような部活動やサークル活動に属さない個人参加学生も迎え、定例会には毎回20名程の学生・社会人が参加するようになりました。学生たちの間に着実に浸透しつつあると感じられます。

「ここに集うメンバーで、とにかく何か一緒に始めてみよう！」という新たな目標が掲げられ、「いこのひろば」と名付けられるプロジェクトが誕生しました。本格的なスタートを前に、二回の試験的な活動経験を基にし、東京都渋谷区教育委員会の「えびす青年教室」の運営から学び、それから独自の企画書を作成しました。平成22年10月から「障がいの有無に関係なく、地域に住む人たちがみんなが楽しく充実して過ごせる地域」を目指し、平成22年10月からは「いきいきプラザ都留」において、毎月第3日曜日に、全体活動やクラブ活動とおして一日を楽しく過ごそうというプログラムを実施しています。

(すぎもと てるじ・地域交流研究センター長

「第7回地域交流研究フォーラム」の開催 平成23年1月30日(日)

■ 杉本光司

「ボランティア」を通じた交流も3年目を迎えますが、地域に根差したボランティア活動を目標に、今、改めて、その意義、現状、将来について考える一つの場として、第7回地域交流研究フォーラムを

開催しました。このフォーラムは、地域交流研究センターと都留市社会福祉協議会との共同主催ということで、地域交流の新たなスタートを切る機会ともなりました。

基調講演では、地域福祉分野での第一人者であります、大橋謙策先生に「ボランティアが地域を変える」と題して、福祉社会における歴史と現状、ボランティア活動について、そして地域の再生・活性化へ向けての分かりやすいお話を頂きました。事例発表・活動報告では、「ボランティアひろば」、「都留市ボランティア連絡会」、「都留市まちづくり市民活動支援センター」の三団体から日頃の活動状況等を紹介して頂きました。午後のプログラムでは、毎月実施している「いこのひろば」でのクラブ活動の特別版として、キー作り、スポーツ、手作り楽器製作、ラッピングの4プログラムへの体験参加もしてもらいました。

今回のフォーラムは、山梨県内の市町村の福祉関係者をはじめ、220名もの方々が出席して下さい、盛大に開催する事が出来ました。また、県立桂高校のJRCクラブから3名がボランティアスタッフとして参加してくれましたが、このことも新たな交流の芽吹きを予感させる大きな成果であると思います。

(すぎもと てるじ・地域交流研究センター長



「いこいのひろば」を設立当初から軌道に乗せるまで、一貫して関わり、また仲間づくりを行ってきた内田哲也さん、下平佳樹さんにその経過と思いを、社会学科設置科目「現代社会と市民参加」の中で話してもらいました。内田さんからは、各自が取り組んできたボランティアサークルの活動に加え、なぜ、市民や福祉の専門家も含む形での「ボランティアひろば」という場を作る動きができたのか、また、下平さんからは、「ボランティアひろば」がさらに「いこいのひろば」を生み出す経過について、話してもらいました。

(編集部)

ボランティアサークルから ボランティアひろばへ

■ 内田哲也

■ある疑問をきっかけに

私たちが「いこいのひろば」をはじめると前は、それぞれが異なる場所で、異なる活動をしていました。私や下平君は「つくしの会」というボランティアサークルで、献血の呼びかけとクッキー作り、お祭りや行事への参加、さまざまな福祉施設への訪問などをしていました。

それはそれで充実していたのですが、私たちは当初からある疑問をもっていました。それは文大の中でボランティア活動をしている団体は複数あるのに、お互いが何をしているのかさっぱり分からないことです。同じボランティアを志しているのに、何故連絡すらしないんだろう？別の団体はどんな活動をしているんだ

ろう？ひよつとしたら協力できることがあるんじゃないか？そんな疑問はもちつつも、なかなか交流は進まないままでした。そんな折に生まれたのが、「文大ボランティアひろば」でした。

「文大ボランティアひろば」とは、学内のボランティア団体が集い、ボランティア情報の交換やそれぞれの活動報告をするだけではなく、大学の地域交流研究センター、社会福祉協議会、ボランティアコーディネーター、福祉施設の職員の方など、学内だけでなく、地域に住むさまざまな方々が一堂に会し、募集や呼びかけを行う、集いの場です。

ボランティアであるため、活動は全て自発的であること。「いこいのひろば」自体はサークルではなくあくまでも集う場であるため、役員を置かないこと、各サークルの負担を増やさないこと、サークルや組織には所属していない、学生や一般の市民の方も気軽に来られるようにすることなどが会の理念として盛り込まれました。

■「いこいのひろば」実行委員会の始動

そんなボランティアひろばでの情報交流を通じて、東部授産園「みとおし」という、障がいをもった方々が働く施設で行われているレクリエーション活動を知り、私たちは月に1度「みとおし」に遊びに行くようになり、施設の利用者さんと一緒に料理を作ったり、ボウリングをしたり、レクリエーションをしたり、楽しい時間を過ごすなかで、これまで遠い存在だった障がいをもった方々の考え方や、気持ちを知らることができたと思います。

そんなある日、利用者さんから「月に1度の活動は

楽しいけれど、もっとこういう機会が欲しい」という意見を聞き、私たちはさらに活動を広げることを考えはじめました。当初「ボランティアひろば」で立案されたこの企画は、話し合いの中で「ボランティアひろば」はあくまでも情報交換の場なので、新しい企画会を本格的に行うためには別の組織を作って出発しようということが決まりました。それが「いこいのひろば実行委員会」です。

まったくのゼロからのスタートではノウハウも時間も足りません。私たちは渋谷区で行われている、「えびす青年教室」という先進事例を参考にすることにしました。しかしながら地域的特性や実施母体の違いがあるので、そのまま踏襲するわけにはいきません。月に3回ほどの企画会議をコツコツ繰り返し、私たち独自の企画を作りあげていきました。社会福祉協議会の森嶋美子さんと相談をしながら、地域の中から協力してくださる方を探し、そしてこれまで関わりのなかった方々とも連絡を取り、アドバイスをいただいたりして、十月の第一回目の開催までこぎつけました。

このように、目に見えない部分でも多くの方の協力があつて、実現したのが「いこいのひろば」です。

(うちだ てつや・社会学科現代社会専攻4年)



パティシエ姿で、フォーラム午後の部「ケーキづくり教室」の様子を報告する内田哲也さん

障がいのある人とともに 地域づくりにもむけて

■下平佳樹

■「いこいのひろば」とは？

ボランティア広場でのつながりの中で、一步、実践に踏み込んだ活動してみようという事で誕生した「いこいのひろば」。その「いこいのひろば」が目的としていることは「障がいの有無に関係なく、地域に住む人たちが楽しく充実して過ごせる地域づくり」です。具体的にどんなことをするかというと、18歳以上の、知的障がいなどのある人々を中心的な参加者として、学生、市民の人たちとともに企画づくりや実際の運営に携わり、一か月に一回、イベントを行います。通常、毎月第三日曜日に、「都留市保健福祉センターいきいきプラザ都留」を会場に、半日は全員が一堂に介してともに行なう「全体プログラム」(例えばお茶会、クリスマス会、ウォークラリー等)、もう半日は個々人の希望する内容に応じて実施する「クラブ活動」(スポーツ、料理、音楽、芸術など)の二種類の活動を行います。昨年十月に本格始動し、今回のフォーラムで、四回目をむかえました。

そもそもなぜこうした活動が生まれたのか、少しさかのぼりましょう。

■障がいをもっている人たちの願いを知り：

参加者さんである知的障がいをもつ人たち、そしてそのご家族はどのようなことを地域で実現したいと考えているのでしょうか。それを知るために、都留市近辺の、複数の施設に呼びかけ、障がいをもった人たち

を招いてその思いを聞く「おしゃべり交流会」を開催しました。いろいろな声があがりました。「もっと仕事がしたい」「仕事を含め、将来の不安を無くしたい」「友だちがほしい」「人間関係を円滑にしたい」：そして最も多かったのが「休みの日には何もやるのがない！暇！」という声。外に出て行くにも移動手段がないし、誘い合つて出かける友達も少ない：そんな実態が示されました。

人とふれあつて、話をして、仕事や日々の愚痴を言い合つて：そんな普通のことを普通にできないのは切ない：というわけで、月1回開かれる「いこいのひろば」に行けば、人がいて、話ができ、一緒に興味のあることが出来る。そんな場所作りを目指して今まで頑張ってきたわけです。

「いこいのひろば」が大事にしている、余暇支援、友達づくりの場として、障がいの有無に関係なく、私たちも一緒に楽しむ！というコンセプトは、上記のような経過から生まれました。

■「いこいのひろば」から学んだこと

自分の得意とする仕事や分野で一生懸命輝いている人たち。一度困難にぶつかつても諦めずに頑張り続けている人たち。ハンディキャップを抱えながら、日々の充実を願っている人たち。そういう人たちと一緒に何かをしたい。そんな思いを胸に私は所属するボランティアサークル「つくしの会」を通して、これまでさまざまな地域活動に参加してきました。

そういつた出会いのなかでいつも教えられるのは、自分が理解していることは、実にほんの少しなのだということ。経験によって裏付けされた人の想いや考え

は、本人以外は簡単には計り知れないということです。最後に「いこいのひろば」の運営に携わる学生側の支援サークル「IKI」の会員募集中です！興味にある方は一度会議を覗いてみてください。会議は、市民の人と一緒にほぼ毎週水曜日18時30分から4号館会議室で行っています。

(しもだいら よしき・社会学科現代社会専攻4年)



ホームページを示しながら「いこいのひろば」について報告する下平佳樹さん

フォーラムでは、大学から歩いて五分ほどのところにある就労支援センター「いちごいちえ」の皆さんもいらして、お豆腐、コロッケ、ジャムや手作り雑貨の販売をしてくださいました。「いちごいちえ」とは、障がいを持った人が、就労にむけた知識の習得や実践的学習にとりくむ就労支援センターの名称です。精神障がいを持つメンバーが8割を占めますが、さまざまな障がいを持った人が、ここで、就労移行・就労継続（非雇用型）と言われる支援サービスを利用し、生産活動に従事しています。そして同センターの運営主体が、NPO法人「ヒューマン・サポート翼」（理事長 山岸公人さん）。同法人の職員で、この日も店頭販売を切り盛りなさっている山岸ゆかりさんにお話をうかがいました。

（聞き手 田中夏子・編集部）

地域で働ける社会的環境づくりをめざして

—就労支援センター「いちごいちえ」さんに聞く—

フォーラム会場には、午前中、200名を超える関係者が参加。冷え込む一日でしたので、二号館前の販売コーナーではとくに温かいものが短時間で売り切れました。「いちごいちえ」さんでは、通常、お豆腐が主力販売製品ですが、この日は特別に、フォーラム参加者がその場で食せるように、おからコロッケも用意。ボリュームありながら、薄味で、身体にもよく、美味です。

ふだんのお仕事の様子をおうかがいすると、お豆腐製造・販売は、週に二日、毎回50丁ずつ、計100丁の売り上げとのこと。個人のお客さんがほとんどで、

一人で五丁買い込んでいくこともあるとか。また、地元JAや河口湖町の福祉給食にも利用されているようです。一時期、地元産の大豆を入手したい、ということとで、大豆づくりに取り組む本学社会科学科の学生たちにもご相談いただき、さまざまな接点があります。

日々の生産活動に従事しているのが、27名の就労支援センターへの登録者、そして山岸さんたち6名のスタッフの方々です。精神障がい、知的障がい、発達障がい等、さまざまな障がいを持った人たちの、仕事や暮らしの面での社会への参画を支える事業といえましょう。

同センターは、「就労支援」と並んで、社会生活技能訓練（SSIT）と呼ばれる活動も、週一回の割合で取り入れています。これは、コミュニケーションに苦勞を抱えるメンバーが多いことを受けて行なっているもので、簡単に言えば、自分の気持ちを表現し、他者に伝える活動を意味します。具体的には、お互い、困りごとや悩みを出し合って、その解決方法をみんなで考えるというものです。

今後のことをお聞きすると、事業をめぐってさまざまな構想をお話くださいました。お豆腐づくりを中心にしつつも、ジャムや手作り雑貨の販売、そして西桂のフェアトレード事業者さんの協力で、マヤナッツのコーヒーの袋詰めの仕事も始めています。マヤナッツは、ノンカフェインコーヒーですが、成分的に健康によいとされている他、栽培国グアテマラの環境保全や仕事起こしにもつながるフェアトレード商品として注目されているとのこと。また今後は、大量に出るおからを活かして「スイーツ」を作ることにも検討中とのこと、仕事の夢が広がります。

最後に「いちごいちえ」の皆さんからは、障がい者の就労についてぜひとも地域のみなさんのご理解とご協力をいただければ、とのメッセージも寄せられました。

お話をうかがいながら、こうした夢を受けとめられる地域社会を作っていくことの必要性をあらためて感じました。



主力製品のお豆腐の他、手作り雑貨も販売

「ねえ、上原さん、学生さんが市民と関わりを持ちたいとの要望があるのだけれど参加できますか？」と社会福祉協議会の森嶋さんから聞かれ、私に何か出来ることがあるかと不安のなか、参加することにいたしました。毎月第四水曜日、しっかりと手帳に書き込み、出来る限り参加してみようと思えました。回を重ねる毎に都留市民の私以上に都留のことを思い、都留市に対し何か残そう！そんな学生の思いがひしひしと私に伝わってきました。

ボランティア広場、 いこいの広場と関わって

ボランティアコーディネーター ■ 上原 幸子

ボランティア広場、そしていこいの広場には、学生はもとより、市民の方々も深く関わっていただいています。都留市商店街で化粧品店を営む上原幸子さんもその一人。活動を通じてお考えになっっていることなどを書いていただきました。(編集部)

今まで自分のこと、自分の身の回りのことで気持ちもいっぱいでした私は大変恥ずかしいとも感じるようになりました。

学生さんは勉強が一番！私自身子どもを大学に通わせていた頃は「子どもがボランティア？」：とても考えられませんでした。

いろいろ話し合いのなかで迎えた第1回「いこいの広場」(平成22年10月10日)。ケーキ作り、午後はスポーツに文化系。このなかで参加者と共に楽しむ学生、それと同時に参加者の零れんばかりの笑顔、人の心を和ませる、正にこれがいこいの時間。私たちが楽しみ、笑顔で接すれば自然に相手にも笑顔が生まれる。現在いこいの広場に参加されている方々はかなり敏感に人の心を読み取ります。この人たちに笑顔が出るということは心を許しているのだと思い、ただただ感心するばかりでした。

今後はいこいの広場で、春の花壇づくりや夏の七夕飾りなど：いろいろみんなできつくり、それを展示できる場所があったらいいかな？と願っております。

先日ある先生がこんな話をされました。「ボランティアをしながら、ボランティアをしなくても良い都留市にしたい」と。皆が、ボランティアだよと言わず自然に手が差し伸べられる、そんなの思いを全ての人にもってもらいたい。「隣のことは知らないよ」ではなくお互いに助け合える街づくり、それが私の理想です。

(うえはら さちこ・ボランティアコーディネーター)



フォーラム午後の部で、ラッピング教室の講師として参加者に語りかける上原幸子さん

ボランティア広場設立前から、さまざまな形で学生たちとの活動をつくりあげてきて下さったのが東部授産園「みとおし」のみなさんです。その一人、職員の佐藤保成さんは、根気よく学生たちの活動を支えていただいています。(編集部)

もっと交流したい

■佐藤保成

私の職場である東部授産園「みとおし」では月に1回、施設の利用者であるメンバーが、自分たちの手で企画を立て、調理実習やレクリエーションを行なう「カンパニー」という活動を開催しております。その場には都留文科大学生や地元的一般ボランティアの方々にも参加していただき、活動の盛り上げ役に一役かっ

てもらっています。カンパニー活動は開園当初から続けており、回を重ねるごとに、メンバーも地域の方と交流するのを楽しみにするようになりました。そんななか、自然とメンバーの口から「地域の方ともっと交流したい」という希望があげられ、この声に後押しされてボランティア広場に参加し始めた次第であります。

主に社会資源の情報交換、交流を中心に活動するボランティア広場の中で、施設ボランティア、お祭り、募金活動など、学生はさまざまな活動をしていました。嬉しくもあり、ありがたかったのは、学生が現状に満足せず、地域を変えたいという視点を持ち、「地域の方ともっと交流したい」という気持ちを沢山もっていたことです。そんななか、大学の先生や障がいをもたれ

た方の親御さんの協力を得て、「もっと交流したい」から始まった「いこいのひろば」活動は誕生しました。活動が始まり企画段階から一年半程経ちますが、そのなかで学生のパワーにはいつも驚かされます。リーダーシップを発揮して積極的な人、自分の得意分野を生かす人、相手の話を聞く力をもつ人、責任感をもつて行動する人などそれぞれの持ち味を生かし活動しています。今回行なわれた、地域交流研究フォーラムでは新たに地元の方との接点も増え、さらに活動の場が広がっていくと思われま

ともあれ、「いこいのひろば」は今まさに始まったばかり。この活動が十年二十年と続けていけるように、「参加者」「学生」「地元の方」などこの活動に参加する人全員で白紙から作り上げていきたいと思っております。

(さとう やすなり・東部授産園「みとおし」職員)



ケーキづくりでは、チョコを振り入れる人、生地まぜこむ人、ボールをしっかりと支える人と細やかな作業分担が自然とおこなわれていました。

「ボランティアひろば」設立当初から、地域の方々に積極的に声をかけて下さり、学生たちの思いと地域のみなさんの思いとを橋わたしなさってきたのが森嶋美子さんです。（編集部）

一人ひとりが自分らしさを 精一杯発揮できる活動をめざして

地域福祉活動コーディネーター ■ 森嶋美子

平成20年6月に文大ボランティアひろばを初めてから今日に至るまでを改めて振り返ってみると、いろいろな方々の顔や、いろいろな場面が思い浮かびます。お互いによく知り合うことからスタートしたこのひろばには、徐々に地域から学生ボランティアを求めめる人が飛び込んでくるようになり、地域と学生を結びつける場として着実に発展してきました。

新しい出会いから、人と人との信頼関係が形成され、文大ボランティアひろばに集う市民と学生によるさまざまな実践が繰り広げられてきました。

そんななか、「障がいの有無に関係なく、地域に住む人たちが楽しく充実して過ごせる場を創りたい」という想いを発信する人も出てきました。自分の想いを率直に語り、その想いに共感した者同士がプロジェクトチームをつくり、新たに「いこいのひろば」が生まれました。毎回、一人ひとりが自分らしさを精一杯発揮して活動しています。参加者から「楽しかった」との声をいただき、皆で達成した喜びを分かち合っています。



「いこいのひろば」の定例会議で議事進行をする
森嶋美子さん

世代や立場の違う人たちが集うなか、共に支え合い助けあうという共生の心も育まれています。学生にとっては、初体験も多く緊張する場面が多々見受けられますが、不安や緊張感を乗り越え、そのあじわった喜びが自信に変わっていきます。日に日に成長する姿を一番間近で見てこられたことは、社会福祉協議会の職員としてこの上ない大きな喜びです。

1月30日には、これまでの活動の成果が実り、地域交流研究センターのご支援ご協力により、都留文科大を会場として第7回地域交流研究フォーラムを開催

することができました。「ボランティアの力が地域を変える」というこの壮大なテーマは、文大ボランティアひろばに関わってきた皆の共通の願いです。

今年は3年目の節目の年になります。今後は、より多くの市民や学生に参加していただけるよう広報・周知活動を強化し、地域に根ざした交流のひろばにしていきたいと思えます。

（もりしま よしこ・都留市社会福祉協議会
地域福祉活動コーディネーター）

特集2：農と山林に向かう

ここ数年、学生たちの農によせる関心が徐々に深まってきました。「農」といっても、その内容や接近方法は多様で、特集Ⅱ後半に見る通り、農との出会い方、つき合い方、活かし方は、それぞれの団体が独自に編み出してきたものです。そうした諸団体が一堂に会して、ぜひとも意見交換の場をもちたいという機運が高まり、2010年末から学生たちが何度も企画会議をもった結果、2011年2月15日、「農」大生交流パーティーが実現しました。集いでは、この企画にむけて、学生たちの背中を押してくださいと「カフェかたつむり」の長谷美奈さんをお招きしてお話をうかがうとともに、団別に設立の経過や活動内容、今後の課題等、相互に情報交換をした後、テーマ別の分散会をもって、「農」をめぐる意見交換を行いました。その様子をお伝えします。(編集部)

第1回「農」大生 交流パーティー 開催!

■ 崎田史浩

都留文科大には農的活動に主体的に携わっている団体やサークルが多いのではないだろうか。そこで、「農」を共通項として活動をする学生が繋がり合う機会を作りたいとの思いから、「第1回「農」大生交流パーティー」を企画しました。

参加者は、農業サークルとして20年の歴史をもつ「Social菜園s CLUB」、発足して2年目で出荷・販売活

動にも手を伸ばす「農学部」、十日市場を拠点に水掛け菜を栽培している「和み菜家」、地域との交流のツールとして畑を運営する「work waku都留」、大学の先生と学生が協同でコメ作りをおこなう「田んぼクラブ」、そして授業の一環として生まれ、大豆を栽培し加工するという体験を大学生活に組み込みたいとする私たち「大豆生活」。

各団体の活動スタイルはそれぞれ異なります。しかし、同じ都留で農的活動に取り組むのであれば、「他団体のことを知らないよりは知っていたい」との思いが各団体の代表同士を結び、協同で今回の企画を実現させることが出来ました。活動内容を共有し合い、情報交換し合うことは、自分たちの活動を見つめなおす機会にもなり、活動を広げるきっかけになるはずです。また、連携や協同の可能性を探る発展的な交流を育むことも期待できると思います。当日の参加者一人一人が、自分の足元を見直すきっかけとなるだけでなく、団体の垣根を越えた仲間づくりの場になればとの願いを込めて当日を迎えました。当日は、各団体の活動発表だけでなく、田中夏子先生や「カフェかたつむり」店主の長谷美奈さんをお招きして、貴重なお話を聞いていただきました。25人の関係者が集い、2時間が短く感じられるくらい活発な交流と議論が交わされました。

今後は、各団体の緩い繋がりを「農ネット」(文大生農業ネットワーク)と称して、農業に関わる情報の共有や、協同の企画を「農ネット」を通じて提案し合っていくという方向性が育まれました。



文大生との 出会い、 連携の予感

■長谷美奈

もし、人が自らの暮らす場所で、食べるものやエネルギーを生み出し、循環させ、その地域の環境を見守る役割を担うことができれば、これから先もこの地球で暮らすことができる―環境問題がとりあげられてきた21世紀に入ったばかりの大学時代から、消費型ではない新しい暮らしを求めて、私はさまざまな旅をしてきました。色々なことが複雑化している世の中ですが、シンブルに現実を見てみると、いのちを食べていきている私たち。原点に還って、食べ物の中のちとそれを育む地域の環境を大切にしたいという思いをもち、地産地消型のオーガニックカフェを開こうとしていた矢先、機会あって「地域おこし協力隊」として都留市にくることになり、昨年9月より「カフェかたつむり」を運営しています。

ある日、大学生4人組が課題をもってやってきました。それは、プロジェクト研究の授業で考案した特産品の成果物の発信先を探しているという相談でした。大学の授業のなかで、まちづくりに関わるフィールドワークを実践していることに興味をもって、何度か大学に足を運んでいたなら、さまざまなお学生さんが、カフェかたつむりを訪ねてきてくれました。そのなかには畑で米や野菜を育てているサークルで活動している崎田くんがおり、「農系サークルはいくつもあるけれど、

横のつながりはあるの？」と聞いたところ、「ぜひやりたい。僕が呼びかけてみます」。

その行動力で開催された、2月15日の農系サークルの交流会に参加しました。

のべ100人程が参加している文大の農系サークル。その農と暮らしの実践がすでに盛んに大学で行なわれていることは驚きでした。課題も抱えつつ、かなり前向きに農や地域づくりにとりくむ学生一人ひとりと話していると、何かが都留でおこる希望と予感がします。

都留では、農に関することは地域のひととの共通の話題。今後、私はさらに学生が地域と交流する窓口になり、一緒に取り組んでいくことができれば嬉しいです。5月8日(日)には、市役所奥のエコハウスをメイン会場に、「手づくりエコ市」の農産物部門がはじまります。この話に乗る学生さんたちとぜひこのイベントをつくっていききたいと考えています。

(はせ みな・地域おこし協力隊／「カフェかたつむり」運営)





Social 菜園's Club ～設立20年、先輩から 後輩へ、受け継がれる 知識とたのしみ～

■大澤かおり



1989年、環境社会学部のゼミの活動の一環として発足。そのうち、畑先生（生涯学習）や今泉先生（生態学）のゼミの学生も参加して、ゼミの枠を超えた活動となりました。その後、初等教育学科はじめ、他学科の学生も多く加わり、現在では学科の枠を超えた形になっています。

運営方針は「無農薬・有機農法で野菜を作ること」。メンバー全員で管理する共同畑（かぼちゃ、さつまいも、じゃがいも、ハーブ、オクラなど）と、各自で管理する個人畑の二つに分けて野菜づくりをしています。人数は34名。土曜、日曜を使って共同畑の作業をする他、北杜市にある麦草農場で、田植えや稲刈りのお手伝いをしています。また、ご近所の方々からは、野菜の苗や、農法のアドバイスもいただいています。秋の桂川祭では収穫物で作ったお菓子などの販売をし、その後、使い切れなかった食材を利用して畑でパーティを開催。そこにご近所の方をお招きするなどのつながりもできました。

これからは、農地も拡大していきます。現在は、牛糞石灰など購入して使用していますが、自分たちで堆肥にも挑戦していく予定です。農法についての勉強も課題。ホームページももっています。ご興味ある方、ご参照ください。 <http://tsuruu.ac.jp/~social/index.html>

（おおさわ かおり・社会学科現代社会専攻2年）

田んぼクラブ ～年間、自分が食べるお 米の1/3は自給!

■佐藤結生



2005年、地域交流研究センター関係者と学生が、市役所や市の農業委員会との連携で、大学近くに1枚の田んぼを借り受け、耕作することになりました。当時の農業委員会の会長さんは、文大生に部屋を提供する大家さんでもあり、こうした事業の立ち上げにとっても熱心に関わってくださったそうです。

「農業体験」の機会は、多く存在していますが、たいへいは遠くまで出かけていかねばならず、しかも部分的な関わりしかできない、などの課題がありました。それが、大学から徒歩5分もかからない場所に田んぼを得たことで、学生が年間通して、日常的に田んぼに関わることが可能になりました。最初のころは教員が中心となって運営していましたが、2009年から、学生中心でやっていきたいということになり、2010年度からは完全に学生主体で切り盛りするようになっていきます。

メンバーはゼミや学科、学年などに関係なく、15人。なるべく農薬を使わずに自分の食べるお米を自分で育てよう、というのがコンセプト。今はまだ、播種前の種を薬品で消毒したり田起こしを農協のトラクターにお願いしていますが、いずれはこうしたものに頼らず、自分たちの手で全部やりたいと考えています。

（さとう ゆい・社会学科環境・コミュニティ創造専攻2年）

プロジェクト研究 「大豆生活」 ～都留の食と農を 「大豆」を通して 探求する～

■崎田史浩



「半農半エックス」式に言うと、私たちは「半農半学生」。大豆を栽培し、味噌などの加工品を作ることを通じ、都留の農や食文化に寄り添った生活実践をする、それが「大豆生活」のコンセプトです。

設立は2009年7月、環境・コミュニティ創造専攻の授業で、学生が自主的に課題探求を行なう「プロジェクト研究」に集った6人の仲間が始めました。授業のなかで、都留は固有品種アオハタに恵まれていること、また市内の集落で「曾雌にんにく」が栽培されていることを知って、ならばこれら複数の特産品を掛け合わせて「曾雌にんにく味噌」を開発してみたい!というのが当初の目標でした。昨年度は東京三鷹市で有機農法を行う「三鷹ファーム」さんや富士吉田市の大豆農家堀内治さんをお訪ねし、栽培ノウハウや考え方を学び、そこにさまざまな価値観があることを知りました。

この学習を活かし、私たちの大豆づくりが本格スタートしたのが2010年。約5aの農地を市民の方にお借りし、無農薬大豆と農薬を使った大豆を比較栽培。播種、土づくりは都留市役所の清水一夫リーダーに指導いただきました。品種もそれぞれ白大豆とアオハタを用意し、4種類の大豆を収穫しました。夏の天候も影響してか、収量には恵まれません。2011年1月には「都留アクティブ」(法能)の志村淑子さん宅で味噌づくりを体験し、2月には収穫したアオハタ大豆を使って三つ峠グリーンセンターで地域の方々や60kgの味噌を作りました。今後は、作った味噌の半分は自家消費に使いながら、残り半分は地域のイベントに出向き販売活動も行なっていくことを考えています。

（さきた ふみひろ・社会学科環境・コミュニティ創造専攻2年）

農学部
～農を通じて地域とつながる～

■香西 恵



設立は2009年。最初は初等教育学科2年生が4人で「大豆でひともうけ」しようと活動開始。2010年からは米づくりも始め、現在のメンバーは10人。メンバーが増えるにつれ、「ひともうけ」という当初の目的から方針が徐々に変わり、現在は、「土地に根ざす」ことが私たちのコンセプトです。

「土地に根ざす」とは、地域の人におそわりながら、畑と田んぼをたがやしていくこと、地域にある昔ながらのやりかたや、種を大事にすること、そしてつくったものを出荷し、食べてもらうことを通して地域の人とつながることを意味しています。

宮原と盛里に田んぼと畑を確保し、2010年度は、米、大豆、さつまいも、なす、人参、大根、トマト、モロヘイヤ、ブロッコリー、冬菜、ほうれん草、小松菜、夕顔、キュウリ、黒豆、じゃがいも、玉ねぎ、ねぎ等を作りました。作業は主に毎週土曜日に行い、収穫物は、「スーパー」おなじみへほぼ毎朝出荷するほか、エコハウスでの「手づくりエコ市」にも出店しています。

今後は、循環型の農業をめざしてたい肥づくりをすること、種とりをすること、そしてソバの栽培にも挑戦しようと考えています。また、当初から目的が変化してきたことで、誰に食べてほしいのか、なぜ出荷するのか、売上をどう活用するのか等、運営方針等の共有もはかっています。

(まごうせい) けい・社会学科環境・コミュニティ創造専攻2年

work-waku (わくわく) 都留
～畑を学生と市民の交流の拠点に～

■中嶋拓哉



work-waku 都留は、2003年に社会学科の授業「ワークシヨップ演習」(甲斐徹郎先生)の活動が土台となつて誕生しました。現在メンバーは22人。コンセプトは、「自分たちの『おもしろそう、たのしそう』といった、『わくわくする』気持ちを出発点として、地域の方々との関わり合いや他者との好奇心の連鎖によって、自分たちの『やりたいこと』を実現させる」です。

設立以来、コミュニティ・カフェづくりやフリーマーケットの開催、アパート改装等多くの活動を手がけてきました。畑の活動では農作業を行ない、野菜づくりを体験的に知ることや、畑を拠点にした、地域のひととの交流の場づくりを目指しています。栽培作物は、トウモロコシ、オクラ、トマト、ピーマン、ナス、ゴーヤ、ヤーコン、枝豆、サツマイモ、バジル、ジャガイモ、サトイモ、ダイコンなど。収穫物を使って、いくつかのイベントも開催してきました。例えば2009年夏には、「畑でソーラーキッチンング」、この年の秋から翌年2010年にかけては、畑の一角に「石窯」を手作りしました。その後は「石窯パーティー」を春冬におこない、地域の方々を招いてピザや焼き芋を楽しみました。

今後は、「畑はこんな使い方もできるのか」と思わせるような場所にしていきたいと思っています。work-waku都留の畑が人と人との交流の拠点になればと考えています。

(なかじま) たくや・社会学科環境・コミュニティ創造専攻2年

和み菜家
Social菜園's
washikana大豆



一家だんらん和み菜家
～水掛菜を通じて、ひととマチとつながる!

■神谷 彩

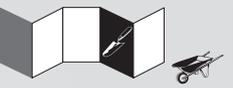
水掛菜の栽培を通じて、その魅力を学生にも地域にも発信したいとの思いで2010年設立。現在、メンバーは8名。コンセプトが四つあります。まず、水掛菜の栽培から販売まで自分たちで行うこと、地元農家の方々へ聞き取り調査を実施し、水掛菜の歴史・生産方法を把握したうえで、日々の観察、作業中での発見を踏まえ、新しい活用方法を探ること。そして水掛菜をきっかけとして、文大生がまちに入り込み、まちへの理解を深め、ここでしかない経験を積み、それをさまざまな地域へと発信していくこと。さらに、学校でも家でもない、その人にとつてのもう一つの居場所をつくり、「楽しくまったりと気が抜ける、家族のようなつながり」を生み出すこと。

協力は、十日市場の水掛菜農家の方々、清水絹代さん、株式会社紀ノ国屋都留工場の皆さん、グラントワーク三島のスタッフなど、多岐にわたります。

活動にあたっては、多くの課題があります。畝づくり、種まき、間引きと、一つひとつの作業に粗さがあること、販路開拓もまだ手薄です。また、水掛菜栽培は、都留の豊かでない湧水資源として成り立っており、私たちはその水を守ることの重要性も発信してきましたつもりですが、水路にごみが多く流れてきている現状をみると、私たちの想いの伝え方の不十分さと地域住民との活動の連携不足だとも思っています。

(かみや) あや・社会学科環境・コミュニティ創造専攻4年

絵・内山歩さんがパンフレットの表紙として描いたものです。



足下から考える 森林再生

■ 泉 桂子

地域交流研究センタープロジェクト「大学周辺山林における次世代の森づくりに関する調査」では、大学周辺の森林「道路（どろじ）の森（*）」の再生を目指して継続的な活動を行なっています。活動内容は対象となる森林の樹木測定、被害木の処理を地域の方の協力を得ながら進めています。プロジェクト1年目の状況を報告します。

社会学科環境・コミュニティ創造専攻は2007年度より発足しました。専攻で農業再生を担当する筆者は専攻発足当初から大学近傍で学生実習に利用できる森林を探していました。2007年11月、大学の隣にある山梨県富士・東部林務事務所のO技師より、都留市市有林を大学に貸していただけるという提案を受けました。ちょうどこの年、「やまなし森づくりコミッション」が始まりました。これは、山梨緑化推進機構が荒廃した山の持ち主と森林を整備したい企業・大学などの橋渡しをする制度です。この制度を一部利用し、2008年4月、都留市市有林約1haを大学教育の場として都留市より借りることになりました。

2008～2009年度は、主に環境GP(代表者・

本学初等教育学科坂田由紀子教授、詳しくは本「通信」第14号を参照ください）の予算を活用し森林整備を進めました。2010年度は前述の通りプロジェクトに採択され、懸案だったアカマツ枯損木の伐採を山梨県中央森林組合にお願いしました。これにより安全・快適に利用できるようになりました。2008～2010年には環境・コミュニティ創造専攻「フィールド体験」、2009～2010年には同専攻「フィールドワーク」などの授業で活用してきました。

これまでの作業・調査により、森林の構造が明らかになってきました。主な構成樹種はアカマツ、ケヤキ、ミズギ、コナラなどです。アカマツの枯損率は約50%で松食い虫の被害が顕著です。なお、筆者はこれまでの取り組みを地域環境フォーラムや日本森林学会などで発表してきました。各方面から反響をいただき、とくに複数の大学の林学関係者から、演習林共同利用のお誘いをいただいたことは、筆者にとつて大きな励みとなりました。

これまで、主に1～3年生を「道路の森」へ引率してきました。彼ら・彼女らは「都留の里山の現状を知って非常に驚いたと同時に失望もした」、「実際に山に入ると自分の無力さ、自然に対する理解のなさを痛感した」などの感想を寄せてくれました。なお筆者は「道路の森」を通じて、先述の山梨県林務事務所、山梨緑化推進機構、林野庁山梨森林事務所、森林組合などとの関わりを作ることができ、地域の森林・林業を考えるきっかけを得ました。今後も至らない点が多くあるかと思いますが、貴重な学びの場として「道路の森」を活

用していきます。

（いずみけいこ・本学社会学科環境・コミュニティ創造専攻教員）
* 「道路の森」はやまびこ競技場と楽山球場の間にある約1haのアカマツ荒廃林で、根田入山にあります。



ノギスを用いた直径の測定（環境・コミュニティ創造専攻、フィールドワーク）



コンパスをもちいた測量の様子（環境・コミュニティ創造専攻、フィールドワーク）



小俣さんとクスノキの製材所

■鳥原正敏

「楠（クスノキ）」は古くから彫刻に用いられてきました。それは適度な硬さで彫りやすく、木の繊維が複雑に絡み合い割れにくいからです。しかしその反面、板材や柱材など建材として使うには乾燥が難しく、あまり一般に流通する材木ではありません。

私の担当する美術教室には「楠」を素材として彫刻作品を制作する授業があります。しかし本学に着任した6年前、私には都留に知り合いもなく楠を手に入れる術がありませんでした。そこで、わざわざ東京都内の材木屋さんから授業に必要な量だけを取り寄せていました。これは、制作に必要な部分まで取り寄せる運送費用がかさむからです。

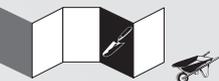
「木」という素材を深く理解するためには、1本の丸太材からその性質を理解し、制作に適した部分を選ぶことも大切です。そこで、なんとか大学の近くで楠を手に入れられないものかと考えていた折、地域交流研究センターの北垣憲仁先生のご紹介で、製材所の小俣武二さんと出会うことができました。また2年程前には小俣さんに、楠の丸太材を扱っていただきました。小俣さんの製材所は大学から車で10分ほど、都留市内にあり、さまざまな種類の丸太材を製材しています。私のように「つくること」に興味のある人間にとって、そこはまさに宝の山、端材や木端を見ているだけで

クワクワする場所です。また、小俣さんから伺う木についての知識も大変興味深く、道具が心地よく配置された空間に創作意欲を掻き立てられます。

このように小俣さんとの出会いには、単に楠を手に入れられるようになっただけではなく、さまざまな可能性を感じています。なにより私の専門分野である彫刻の範疇を超えて広く「木」について語り合い、学ぶチャンスがあるということは学生のみならず私にとってもすばらしいことです。今後も小俣さんとの交流を通して更に考えを深めて行きたい、いつか美術教室の学生も交えた交流になれば、と願っています。小俣さん、今後も宜しくお願いします！

（とりはら まさとし・初等教育学科美術教室教員）





学校林を活用した自然体験活動に向けて

■ 中込一雄

「明るいもみじ美しく学校林の楽しさよ」これは附属小学校歌3番の一節です。校歌に「学校林」という言葉が登場する学校もそう多くはないと思います。それほど本校の教育活動と学校林が密接に関わっているかと思われるかもしれませんが、今は殆ど活用されていません。古い資料を調べますと、昭和18年に学校林として谷村町外一ヶ村恩師県有財産保護組合と転貸借契約を締結し、昭和45年には、800本以上の木材を売却し、学校予算の一部に充てられたという記録があります。また、翌年には植林も行われています。昭和59年には学校林コンクールに応募し、ハイキングや名札掛けなど教育活動の場として活用していたという記録もあります。それ以後の記録は残っていません。平成22年の4月に本校に赴任し、本校の学校林がどこにあるのか、職員や子どもたちに聞いたところ、誰一人知らなかったというのが現状でした。

そこで、校歌にも登場する学校林を、何とか教育活動に活かしたいと考えました。都留文科大学地域交流研究センターの北垣憲仁先生や泉桂子先生とともに現地へ赴き、その活用方法について相談させていただき

ました。そして、本年度はまず手始めに、入学したばかりの1年生を学校林に連れて行き、学校林がどんなところか見せ、そこで自然観察や自然体験を行ないました。また、学校裏の森にはリスやアカネズミの餌台、ムササビ用の巣箱を子どもたちと一緒に設置し、クルミの苗の植樹もしました。

来年度は、学校林や学校周辺の自然を活かした教育活動を計画的に仕組む予定です。学校林では、間伐体験や自然観察、間伐材を使った工作や草木染めなどを計画しています。学校裏の森では、動物との出会いスペース作りにも取り組む計画です。計画を進める上で、都留文科大学地域交流研究センターや南都留森林組合などの機関と連携し、協力を得ながら進めようと考えています。

こういった活動を通して、身近な自然に対する愛着や豊かな心が育まれ、子どもたちの環境に対する関心も深まることを期待しています。校歌を歌う時も、目で見て体験した学校林を思い描きながら、「明るいもみじ美しく学校林の楽しさよ♪♪」と歌うことができるようになるのではないのでしょうか。

(なかごみ かずお・都留文科大学附属小学校校長)



学校林で自然観察



クルミの苗の植樹

宗男さんとの 出会いから

■西丸堯宏

都留市十日市場を流れる柄杓流川沿いに中屋敷という場所があります。現在その田んぼで、僕も所属している『フィールド・ノート』編集部有志が、渡邊宗男さん（80）の指導のもと米と麦を作っています。僕と宗男さんとは3年来のお付き合いで、この中屋敷での農作業のほか、十日市場の昔のようすなどの聞き取りでお世話になっています。

昨年（2010年）の7月15日、田んぼにシマゲンゴロウやコシマゲンゴロウ、ホウネンエビがいるのを見つけました。これは僕が中屋敷で農作業をするようになってから、初めてのことです。宗男さんに聞いてみると、昭和40年頃まで中屋敷の田んぼには、ほかにモタニシやカワニナ、ホトケドジョウがいたそうです。宗男さんはタニシを煮て食べるのが好きだったと言います。この頃は夏になるとホタルもたくさん飛んでいたといい、幼少期を十日市場で過ごした人のなかには「ザルで掬えるほど」と表現する方もいます。現在の中屋敷でもホタルを見ることができですが、カワニナが田んぼにもいた頃と比べると、だいぶ減ったそうです。

宗男さんはこのところ、年を追うごとに水掛菜を栽培する面積を少しずつ減らしています。体力的な衰えは否定できないと言います。そんななかでも、2011年からタマネギの新しい作り方に挑戦するなど、意欲はまだ衰えていません。

僕が宗男さんと付き合いながら感じるのは、観察し、研究する絶えない探求心をもっているということです。日々の生活のなかで、ほかの畑のようすなどをいつも気にかけています。良いところがあれば、それを自分でも活かそうと「技を盗む」のです。今までのやり方に固執せず、新しいやり方を柔軟に取り入れていきます。宗男さんの仕事は、つねに最良の方法を求めて、新しい方向へと変化を続けているのです。

僕はそんな宗男さんの姿に、つねに挑戦する気持ちを失わないことを学んだのです。

（にしまる たかひろ・社会学科環境・
コミュニティ創造専攻4年）





テントウムシに異変が…

「テントウムシの越冬を見守る会」

■ 畑 潤

都留文科大学には、11月初旬の連休のころの晴れた暖かい日中に、テントウムシ（ナミテントウ）が越冬のために大挙して押し寄せてきます。主に自然科学棟の外階段のところで、私の研究室のある2号館の6階です。バルコニー部分から廊下に入って来ようと羽を大きく開いて飛ぶさまがサッシ越しに観察できるので、その美しい生命の躍動は感動的です。

テントウムシは、どのようにして館内に入ってくるのか不思議なのですが、締め切った廊下、トイレなどに大挙して入ってきますし、研究室にも入り込んできます。廊下で踏み潰されるのを避けるために、掃除をする職員の方が掃除機で吸い取って「処分」するのですが、掃除機のゴミの袋がテントウムシでばんばんになっているのを見たことがあります。飛来してきたあとは、階段踊り場のコーナリーの部分などに密集し越冬します。そして春に飛び立っていきます。

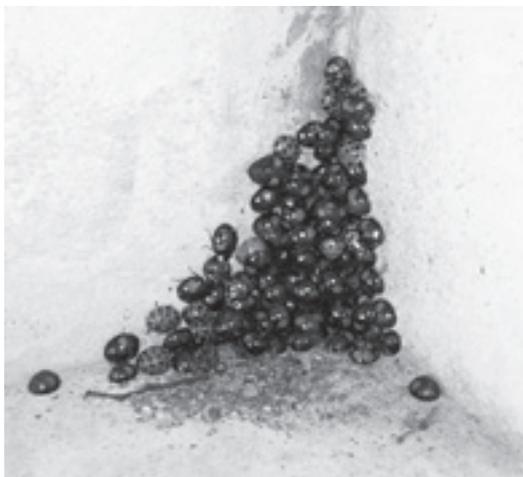
この毎年のテントウムシを、多くの大学人で見守り観察してみようと、「テントウムシの越冬を見守る会」を2009年の秋にスタートさせ、大学院ゼミ生と観察に向いたりしてきました。この年は、私の講義（約200名ほどの受講生）でも「会」への参加をよびかけ

ました。早速に、比較文化学科の榊山潤くんが研究室に来てくれ、それから二人での観察交流が続きました。

自然科学棟でのナミテントウの越冬に関しては、山下恵子氏の詳細な研究報告があります（新妻昭夫編『ナチュラリスト入門 秋 落葉の手紙』岩波ブックレットNo.152、1989年）。そこには、越冬固体数10万2038匹という観察データも記されています。

ところが、2009年度から飛来数が極端に少なくなりまして。2010年度は、「ほとんどいない」というほどに激減しました。このテントウムシ越冬については、自然科学棟の事務職員の志村千代子さんや友人の方も関心を寄せてくださり、「今年はテントウムシは、キャベツ、ジャガイモ、ナス、キュウリ、トマト、ジュウロク（インゲン）に全然こなかった」と、春以来、地域の畑から消えているということが話されました。「スズメが少なくなっている」「ハチも少ない」「イナゴもいない」「コガネムシは前からいなくなっている」といった兆候も語られました（2010年11月30日）。

（はたじゅん・社会学科教員）



自然科学棟の外階段（2009年）

テントウムシの観察から見えること

■ 榊山潤

昨年に引き続き、今年も畑先生とともにテントウムシの観察を行いました。昨年の観察では、天候や気温などの記録を行なっていなかったため、今年はそうした記録をつけながらのスタートでした。

自然に生きる生き物の観察は、簡単なようで難しく、日常の「コマ」にして奥深いものです。何故なら観察を継続するだけでも大変なことであり、そしてテントウムシを通して見えてくることは多いからです。

しかしながら観察は断続的となり、1月以降はほとんどストップしてしまいましたが、それでも自分自身大いに悔やまれるところでありましたが、それでも収穫は多かったと思っています。

11月9日 晴れ 風若干強い 気温12℃ AM9時40分
 群れ約15匹確認（観察の中心とした群）
 11月11日 快晴 風無し 気温7℃ AM9時43分
 群れ約15匹確認 新たに群2箇所確認
 11月17日 曇り 風無し 気温4度 AM10時31分
 群れ約20匹 新たに群1ヶ所確認

これは今年の観察記録の一例です。寒くなるに従ってテントウムシが群れていくのが数字の上でわかります。一方で、毎年40〜50匹という集団が珍しくなくなりました。一方でも、群が小規模という不可思議な点もありました。1月には急に群れが消失するなど、明らかに環境の変化が見受けられましたが、継続的な観察が出来ずしつかりとした記録は残せませんでした。今後の観察する人々に期待したいところです。

（さかきやま じゅん・比較文化学科4年）

ムササビ観察会に参加して

■千葉真希

以前から都留にムササビがいるとは聞いていたのですが、ムササビがどんな生き物なのかはほとんど知りませんでした。ただ飛ぶらしいということは知っていたので、その姿をぜひこの目で見てみたいと思い、ムササビ観察会に参加することにしました。はじめは参加者のひとりとして観察会に行くつもりでしたが、「スタッフをやってみないか」と声をかけていただき、5人の学生とともに観察会のスタッフを務めることになりました。

観察会に向けて今宮神社で事前観察をおこないました。日没後、神社のご神木を見上げること数分、「あつ、飛んだ!」。私は生まれて初めてムササビの滑空を目にしました。飛膜を広げて木から木へと飛び移る様子にとっても興奮しました。時折、ムササビの「キュルツキュルツ」という鳴き声も聞こえてきました。

そして迎えた観察会当日(2010年12月4日)。私たちは参加者の方を都留文科大学前駅で迎えまして。小学生から70代の方まで、なかには2年連続で参加してくださった方、県外から参加してくださった方もいました。駅舎で学生スタッフがムササビの体の特徴や何を食べているかなどを紹介したのち、電車で東桂駅まで行き、そこから徒歩で今宮神社に向かいました。到着後、参加者の方々と一緒にムササビの食痕や糞を探しました。昨年に引き続き参加してくれた小

学生の男の子が、次から次へとムササビの糞を見つけ、学生スタッフに「これだよね?」と誇らしげに見せてくれました。そしてその男の子は他の参加者の方にも「糞はここにあるよ」と教えていて、微笑ましかったです。日没後、いよいよムササビ観察が始まりました。参加者の方とムササビが滑空するたびに小さな声で「あつ、飛んだ!」とその驚きや感動を共有した時間はとても心温まるものでした。



富士急行線都留文科大学前駅の駅舎内で学生によるムササビの解説がありました

卒業を目前に控えるなかで、改めて都留の自然に目を向け、地域の方と交流することができて本当に貴重な体験となりました。

(ちば まき・比較文化学科4年)



今宮神社でのムササビ観察の様子

「地域交流研究Ⅲ」は山梨県観光部観光振興課の「山梨魅力メッセンジャー事業」とタイアップした講義で、NPO法人「大学コンソーシアムやまなし」からもご

協力をいただいています。講義は県内の第一線で活躍されている外部講師をお招きしての座学と県内各地をめぐるフィールドワークで構成されます。講義のねらいはとくに森と水に注目して地域を読み解きながら、卒業後も学生の皆さんに「メッセンジャー」として県の魅力を内外に伝えていただくことにあります。受講者の感想を寄せてもらいました。(泉桂子 社会学科 教員)

山梨・堤防の知恵

■塚原由佳

私は授業の講義やフィールドワークを通して、山梨の魅力を見直し、再発見することが出来た。そのなかでも私がとくに印象深かったのが、水害を防ぐための堤防に関する話だった。私は国中へのフィールドワークに行くまで、「水害」と「山梨」が歴史のなかで非常に関係が深いということを知りなかつた。そのため、「当時の人々が水害に奮闘し、知恵を振り絞って立ち向かった」という事実をもっと多くの人に知ってもらわなければならない」と考えた。彼らがあの武田信玄までも

が堤防と深く関係していたことを知れば、きっと驚き興味をもつはずだ。武田信玄のこうした業績は、彼を誇りに思い崇拜する山梨の人々にとって非常に重要であり、知っておくべきことではないだろうか。山梨の古くからの魅力を知ることが出来る万力公園にぜひ多くの人に足を運んでもらい、当時の人々の苦労と知恵、そして今も残されている水害対策の結晶を実際に見て知り、感じてもらいたい。

(つかはら ゆか・本学国文学科2年)

この土地に住む人々が 観光を生き返らせる

■朝倉貴泰

山梨県の観光振興について、私は山梨の人との触れ合いを重視していくべきだと思う。これまで私は3年半、山梨県で一人暮らしをしてきたが、そのなかで山梨の人をもつ独特の温かさ、人情深さを何度も感じてきた。同様に観光客が山梨に愛着をもち、もっと長くいたい、また来たいと思えるような場所にしていくためには、山梨の人々との交流や活動によって生まれる心温まる体験が不可欠だ。山梨で生活する住民と観光客を結び付けるような活動がこれからは必要になってくる。たとえば、都市部から無料のバスを用意し、地域の住民とともに富士山や森林のゴミ拾い、外来植物の駆除を行なってもらう。そして、お昼ご飯は現地のお母さんが作ったおいしいほうとうを振る舞うというボランティアツアーはどうだろうか。そのほかに、地域住民と登山や森林浴を行なう企画もいいし、果実園などが忙しい時期の

サポーターとして来てもらうというのでもいいのではないだろうか。また、山梨を訪れた人が宿泊先を選ぶ際にホテルや旅館だけでなく、民家という選択肢も選べるようにするとおもしろい。

(あさくら たかやす・本学初等教育学科4年)



山梨市万力公園での伝統的治水工場の説明



山梨県観光部 窪田克一次長による開講のあいさつ

「地域交流研究Ⅳ」では、受講者が地域の魅力ある人々にインタビューをし、その記録を冊子にまとめました。冊子の編集が地域との交流にどのような役割を果たすかを実地の体験をもとに考察するというのがこの授業の目的です。今年で5年目となります。受講者は25名で、1年生から4年生まで全学科からの受講がありました。地域のかたがたへの取材や記事の作成、校正といった一連の作業のうち、冊子を100部製本しました。完成した冊子は、取材でお世話になったかたがたに配布しました。この授業を受講した学生に感想を寄せてもらいました。(北垣憲仁)

インタビューが映し出す 生き方との出会い

■ 崎田史浩

私たちがふだん都留で暮らしていても、特別なことがない限り、都留に暮らす人と接することは滅多にない。私は、都留の方と交流する活動をサークルで行っているため、都留に暮らす人と接することも度々あるが、相手のことを深く知る機会はない。せっかく都留ににいるのに、身近な存在である都留に暮らす人や町のことから分らないのは勿体ない。そう思っていた私にとって、「地域交流研究Ⅳ」は都留に暮らす人や町との距離を縮めるチャンスだった。

「地域交流研究Ⅳ」では、都留に暮らす人にインタビューを行ない、その取材内容をミニコミ誌にまとめるまでが半年間のカリキュラムになっている。講義は、インタビューの基礎知識を学んだうえでインタビュー

を学生同士で行なうなどの練習を繰り返し、その後は一人一人インタビューしたい人にアポイントメントをとって取材に行くという流れだった。私は、ふだんから国道沿いを歩くたびに横目で気にしていた「諸国民芸品・工芸たけだ」の2代目店長、市川容子さんにインタビューを試みた。はじめて入る店の中には、ひとつひとつ表情の異なる作品が明るく優しいライトに照らされていた。全部、市川さんが全国各地の窯元から仕入れた作品である。市川さんは、自身の感性を物差しに工芸と向き合い店づくりをされている。工芸から発せられる世界観を通して、多くの人に豊かな気持ちを抱いて欲しいとのメッセージを込めて、店を営んでいたのだ。インタビューはもちろん、自分の知りたことを知るひとつの手段である。しかし、そこから得た相手の生き方や価値観に感銘を受けることで、自分の視野を広げ、生き方を豊かにしてくれるようにも感じた。

私たちの取材した記事を一冊にまとめた「COLOR vol.5」。学生一人一人のフィルターを通して、都留に暮らす人との出会いが色濃く映し出されている。実際にインタビューした経験が、普段の学生生活の中でも都留に一步踏み出した出会いを追求したくなった。そして、学生や都留に暮らす人にとって、「COLOR vol.5」が、都留と小さな交流の回路が芽生えるきっかけとなれば嬉しい。

(さきた ふみひろ・社会学科環境・コミュニティ創造専攻2年)



25名の受講生とともに編集した冊子「COLOR」

市民公開講座に参加して

(2010年11月1日・8日・15日・22日)

■平井和也

まず、今回の市民公開講座に参加させていただけたことに感謝致します。

私が本講座について知ったきっかけは『広報つる』10月号の告知でした。民主党政権の政策や日本の政治についての全4回の集中講義ということで、つよい興味をもちました。

進藤兵先生の講義では、世界の政治制度や政党システムに関する政治学の観点からの概説がわかりやすかったです。

村上研一先生の講義では、中国など世界に進出している日本企業の現場の話や、それに基づいた世界のビジネス環境について貴重な話を聴く機会に恵まれました。

とくに、日本企業が生産拠点だけでなく、研究開発拠点までアジアの国々に移転する動きが活発化しており、国内産業の空洞化の懸念があるという話は、これからの日本の産業のあり方を考える上で非常に示唆に富むものでした。

また、中国の反日的な側面がマスコミで注目されがちですが、現地で日本人技術者が評価されている側面もあるという指摘は、別の一面を知るための冷静な視点

点を提起していると思いました。

菊池信輝先生の講義は、歴史という長期的な視点から戦前期からの日本の政治史の流れを概観する内容であり、目の前のことにとらわれがちな考え方を見直す機会になりました。

最後の4回目の講義は3人の研究者の方々の鼎談という形で、非常に聴き応えのある議論でした。

進藤先生が紹介していた米シンクタンクの調査内容がとくに印象深かったです。

小泉政権時代に経団連が政治に口を出す傾向があったという菊池先生の指摘は重要だと思いました。

また、他人の話に耳を傾ける日本人の謙虚さは世界でも特有の国民性であり、そこを強みとして活かしていくべきだという村上先生の指摘は、世界から批判されがちな日本人の自己主張の弱さや、論理的な議論を苦手とする側面を別の角度から見直すヒントになるという感じがしました。

最後に、自分の住む町でこのような貴重な講座を受講できる機会をいただけたことに、心から感謝致します。

(ひらいかずや・翻訳者 市内在住)

平成22年度 都留文科大学市民公開講座

主催：地域交流研究センター
 共催：社会学科

『政権交代1年を迎えた民主党政権と今後の日本』
 ～民主党政権下の日本を政治学、経済学、歴史学の観点から読み解く～

会場●都留文科大学 附属図書館4階
 「学習室」

第1回 11月1日(月) 午後7時～午後9時
 テーマ「民主党政権の政治と政策——政治学の視点から」
 講師：進藤兵
 (本学社会学科現代社会専攻教授)

第2回 11月8日(月) 午後7時～午後9時
 テーマ「日本経済の課題と民主党政権の経済政策」
 講師：村上研一
 (本学社会学科現代社会専攻専任講師)

第3回 11月15日(月) 午後7時～午後9時
 テーマ「過去の政権交代と比較して」
 講師：菊池信輝
 (本学社会学科現代社会専攻准教授)

第4回 11月22日(月) 午後7時～午後9時
 テーマ 鼎談「日本社会はどこへ向かうのか——民主党政権の課題——」
 出演：進藤兵(政治学)×菊池信輝(日本史学(近現代))×村上研一(経済学)



第3回公開講座「教師力スキルアップ 講座Ⅲ学級づくりを活用する構成的 グループエンカウunter講座」に参加して

■川久保蓉子

私が構成的グループエンカウunter(以下、エンカウunter)を知ったのは、大学のときだった。河村茂雄研究室の仲間と、毎年ゼミ合宿でエンカウunterをしていたころを懐かしく感じる。自分の内面に向き合うことを今まで意識していなかったので、いろいろな人たちと話ができることがとても新鮮に思えた。教職に就いて3年、エンカウunterが学校現場で有効なことがよく分かった。

今回は、エンカウunterの基礎基本を教わり、リーダーを中心に実習を行なった。周りにいる人たちは、初対面の人たちである。年を重ねるにつれ、初対面の人たちと話すことに躊躇してしまう自分がいた。そんなことを思いながら、活動が始まった。

初めは、円になり挨拶をした。ただの挨拶ではない。そこには私のためらいを取り去ってくれるような楽しい工夫があった。指で「アウチ」という挨拶をした。そのおかげで、そこにいた人たちの笑い声が聞こえるようになり、安心した。

次に、「もつとお近づきに！」をした。ここでは、究極の選択をしながら自分の価値観などについて話をした。究極の選択のために、同じ選択をした人に親近感が自然にわくようになっていた。「絶対にこっち」と思いながら選択しているために、自分と違つと「ど

うして？」という疑問が自然にわいてくる。同じグループのなかで、自分とは違う価値観に触れると「自分はこう考えていたんだな」と改めて気づくことがある。

普段の忙しさのなかでは、気づかないこともエンカウunterで気づくことがある。そしてこのことはクラスの子どもたちにも当てはまることだと思う。リーダーのかける言葉一つに、その場の雰囲気や流れ、新たな考えに気づくことができるのかできないのかがかかっているように思う。今回、リーダーの先生たちのなるほどと思う説明の仕方、さりげないけどぐつとくる言葉がたくさん聞いた。

終わった後にはいつも「来て良かった」と思うのがエンカウunterである。

(かわくほ ようこ・大月市立七保小学校)



非言語で意思を伝え合いながら協同で1つの時計を描く参加者



エクササイズの説明を聞く参加者



都留文科大で毎年秋に開催される学園祭「桂川祭」。

学生たちが企画したイベントや模擬店などが立ち並びますが、2010年度の桂川祭の二画に、フェアトレード商品の販売を手がけ、またその商品が生産されている地域の様子を展示するコーナーがありました。ひときわ目を引く素敵な小物入れ袋があつたので手に取ると、郡内地域の織物屋さんが生地を提供し、それをインドネシア・アチエの女性たちが縫製してできたものとのことでした。伝統的な地場産業と、インドネシアで貧困や圧政に苦しむ人々の暮らしとをつなぐ着想が、どのように生み出されたのか、この企画を中心に担当してきた一木則子さんに二文を寄せてもらいました。

(編集部)

地場産業と、海外支援を結びつける

■ 一木則子

2010年度の都留文科大の学園祭において、とあるサークルの展示会場にて、私が企画したフェアトレード(*)の布小物を販売してもらいました。このフェアトレード商品は、インドネシアのスマトラ島北部のアチエ(**)という地域の女性たちが作ったものです。このフェアトレード商品の特徴は、使われている生地が山梨県郡内地域の地場産業である絹織物であることです。山梨県西桂町(都留市の隣町)でネクタイを生産して

いる機屋で、私のアルバイト先でもある「(株)川栄」に、端切れやほんの少しのキズなどのために出荷できない生地を寄付していただき、それをアチエへ送って、女性たちに作ってもらい、できたものです。

インドネシアと地場産業の絹織物の間に接点はありません。ではなぜこの商品ができたのかということについてお話しします。私は「インドネシア民主化支援ネットワーク(略してNINDIA)」というNGOの活動に関わっていて、2010年2月にアチエを訪れました。そこで、アチエ女性自立支援プログラム(***)で支援を受ける女性たちと会い、帰国してからは、彼女たちのために自分には何が出来るだろうか...とずっと考えていました。また、アルバイト中には、仕事中心にでる端切れを捨てるのがもつたない、これを何かに活用できないだろうか...と考えていました。そしてふと、絹織物を使用したフェアトレード商品のアイデアが浮かび、それまで別々だった二つの点が、線で結ばれたのです。****)

私一人の力でできたわけではありません。多くの方々のお力添えにより、実現できました。インドネシアと日本は遠く離れています。この企画が実現したことによって、機屋さんとアチエの女性たち、生産者(アチエ女性)と購入者、販売してくれたサークルの人たちなど、いろんな人と人を結びつけることにもなります。



商品を縫製するアチエの女性たち
(NINIGさん撮影)

アイデア次第で、身近なもので思いがけないことに活かせるということがわかりました。私はこれからも、こうした活動

を続けていき、人と人を結び付け、たくさんの人を笑顔にしていけたら素敵だなと思っています。

(いちき のりこ・社会学科環境・コミュニケーション創造専攻4年)



「今、製品の第二段が空を飛んでいる頃ですよ」と話す一木さん

言葉の説明・社会的背景など(一木則子)

*フェアトレード:フェアトレードとは、その言葉通り、公正な貿易のことです。アジアやアフリカ、中南米などの途上国の原料や製品を、適正な価格での継続的な購入を通じて、社会的・経済的に立場の弱い人びとに仕事の機会をつくりだし、公正な対価を支払うことで彼らが自らの力で暮らしを向上させ、自立させることを目指す取り組みです。

**インドネシア・アチエについて

アチエのことをご存知の方は、どれくらいいるでしょうか?「2005年のスマトラ島沖地震による津波の被災地」と言えば、思い出す人も多いかと思いますが。このアチエでは、津波後に和平が締結されるまで、約30年間にもおよぶ長い間、激しい独立紛争がありました。紛争中には、インドネシア国軍兵士や独立運動の民兵だけでなく、女性や子どもを含む多くの民間人が犠牲となりました。なかには、国軍に夫を殺された生活が立ち行かなくなったり、国軍兵士によるレイプの被害を受けた女性たちもいます。和平締結後も、こういった立場の弱い女性たちには、十分な補償がされていないケースが多くあります。

***アチエ女性自立支援:津波被災者や紛争被害者の女性たちに、ミシン縫製技術の訓練などの支援を行っています。詳しくは、NINDIAHP→http://www.nindia.com/

****このフェアトレード商品の売り上げの一部はアチエの女性の収入になるほか、現地NGOのJariAcen(ジャリアチエ)と、日本のNGO・インドネシア民主化支援ネットワークに寄付され、支援活動に使われます。フェアトレード商品に関するお問い合わせは、trade.nci@gmail.comへ。販売対応いたします。

学生たちによる福祉領域の活動は、ボランティアをはじめ、さまざまな場面に及びます。多くの学生は、教職課程で必修化されている「介護体験」で、福祉領域の活動にわずかに触れますが、そのことを発端に、都留市で日常的に障がいを持った人たちとの関わりを深めたり、インターンシップでさらに専門的な取り組みを学ぶケースも出てきました。長谷川南さんもその一人です。この夏、神奈川県ワーカーズ・コレクティブ協会（環境・コミュニティ創造専攻の必修科目で、学生自らが研修先を開拓し、一週間から二週間の実地研修を行なう科目）を実施し、障がい者就労支援のユニークな取り組みを体験した長谷川さんのレポートです。（編集部）

ワーカーズ・コレクティブ協会で 経験した、障がいをもった人の 就労支援の仕事

■長谷川南

私は、教職課程の「介護体験」で、都留市内の精神障がい者の作業所にて実習を行なって以降、同所でその後もボランティアをするようになった。介護体験は5日間だったが、その5日間の中でも精神障がい者の方から直接、障がい者への、社会からの風当たりや強さ、制度面での対応の不十分さをうかがうことができた。介護体験をするまで私は社会的に「障がい者」とされる人々と接しなことがなかったが、このことをきっかけに自身の偏った知識に気づくとともに「市民の地域参加、地域活性化」を意識するようになり、さ

らには、障がい者と健常者といった仕切りを取り払い、全ての市民が地域において快適に過ごすためには、「就労」を支えあうことが必要なことのひとつなのではないかと考えるようになった。フィールド・インターンシップではそうした分野で事業を行なっている団体を探し求め、ワーカーズ・コレクティブ協会と出会うこととなった。

ワーカーズ・コレクティブ協会そのものは、福祉工場や作業所ではない。「生活者・市民の参加と責任を伴った市民資本」によって非営利の市民事業を創出し、市民が主体となった地域づくりをめざす団体のネットワーク組織である。協会では様々な事業を手がけているが、近年では、障がいをもった人や、さまざまな困難を抱えて人々を就労面で支え、あるいはその人たちとともに仕事を創出する取り組みに力を入れている。

とくに同協会が一昨年3月に立ち上げた「コミュニティキッチンぽらん」は、障がいをもった人や社会との関わりに困難を感じる若い人たちが、スタッフとして働きながら、仕事や社会参加に自信を深め、より本格的な仕事へと踏み出せることを目的とした働き場である。ここでは、安全な食材を使用すること、店舗での販売を介して地域社会との関係を育むこと、環境への配慮した事業を行なうことなど、「五つの憲章」を掲げている。

私が研修を行った時期には、障がいをもった人1人を含む4人のスタッフが、キッチンで、お惣菜づくり

に奔走していた。なかでも、1番印象深かったのは、働いている方の誇りに満ちた表情である。利益よりも誇りをもってひとつひとつの作業を丹念に、入念にこなし、自信をもつ

てお惣菜を作っているスタッフの方々の姿は、障がいの有無を感じさせない一人の人間でしかなく、それだけで勇気付けられた。働く、ということの喜びはここにあるのではないかと感じた。

今回のインターンにおいて、普段の生活では経験することがない部分で、自身の成長に繋がったと思っている。得たことを一時のものにせず、今後の活動へのきっかけとしていきたい。

（はせがわ みなみ・社会学科環境・コミュニティ創造専攻3年）



長谷川さんの研修模様を報じるワーカーズ・コレクティブ協会機関誌『Sen』の記事



編集後記

本号では、市民のみなさんとともに積み上げてきた福祉ボランティアの取り組み（特集1）、そして農や山林に活動の場を見出す学生たち（特集2）について、特集を組みました。また巻頭文は、特集1と関連する形で、日本地域福祉研究所理事長の大橋謙策先生に執筆をお願いしました。大橋先生は、旧来の地縁や血縁とは異なる、新しい形の繋がり創造を呼びかけていらっしゃいますが、特集1ではそれに呼応するように、近年、さまざまつながりを深めて活動の拡充が図られてきた「ボランティアひろば」「いこいのひろば」の関係者のみなさんに、経過や現状を多角的に執筆いただいています。

特集2では、農、そして山林を拠点とした、都留文科大学ならではの授業やサークル活動について、学生の側からネットワーク化が始動したのをきっかけに、関係者に執筆いただきました。これまでも個別にはご紹介をしてきましたが、あらためて集約をしてみると、その存在感はなかなかのものです（本

号に登場した以外の活動もまだまだあります）。加えて、山林、木材といった領域で、教員と学生、地域の方々がともに感動を共有しつつ、学びを深めてきた様子もお読み取りいただければ幸いです。

「トピックス」では、地域交流研究Ⅲ・Ⅳの授業を受講した学生たちの報告、定期的な観察を重ねるテントウムシの様子、ムササビ観察会、他を取り上げました。「教師力スキルアップ講座」をはじめ、センター主催の各種の講座についても報告があります。「市民公開講座」は、民主党政権分析を、政治学、歴史学、経済学の研究者がそれぞれの視点から論じるといふ、これまでとは少し違った趣向となりました。さらに、「地域と世界をつなぐ」視点から、郡内の地場産業とインドネシア・アチェ支援とを結ぶ活動を開拓したトピックス記事もぜひご一読ください。（田中夏子・副編集長）

次号は、「地域の子育て・教育に学び教師養成を考える」を特集する予定です。（畑潤・編集長）

地域交流センター通信 第19号：2011年3月18日

編集：都留文科大学 地域交流研究センター・通信担当（編集長：畑潤 副編集長：田中夏子 杉本光司 佐藤隆 鳥原正敏 品田笑子 北垣憲仁 志村夏樹）

（C）発行：都留文科大学地域交流研究センター

〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 tel:0554-43-4341 (代)

統括編集者：北垣憲仁